



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3140 号 2016.7.22 発行

奇跡の笑顔 第3部・お便り特集(上) 足りない「レスパイト」



高知新聞 2016年7月18日
運動会。母と教頭先生に手を引かれ
喜んで走る音十愛ちゃん(6月、高
知市大膳町の県立盲学校体育館)

全盲で重複障害のある山崎
音十愛ちゃん(11)と母、理
恵さん(49)＝高知市＝の壮
絶な「生命の闘い」を取り上げ
た連載「音十愛(おとめ)11
歳 奇跡の笑顔」(5～6月に
合計21回)。次々と降りかか
る試練を乗り越えて、わが子の
笑顔をつかみ取った小説のよ
うな実話は共感を呼び、県内外
から励ましのお便りをいただ
くとともに、障害児を持つお母

さんからは「人ごとではない話」「レスパイト(家族の休息)制度の充実を」といった切実な現実も寄せられました。11人の方の思いを3回続きで紹介します。(編集委員・掛水雅彦)

■家族の休日は切実な願い■

全国重症心身障害児(者)を守る会県支部事務局長 森下陽子(47)

連載に登場した山崎理恵さんは、守る会の仲間です。大変さはある程度聞いていたものの、ここまで壮絶とは。過去を振り返る作業は大変だったと思いますが、完遂されて、他の障がい児家庭の大きな勇気になったことに敬意を表します。

私の5歳の息子は重度脳性まひで全介助、最重度の意識障害。これまで13回の入退院を繰り返しました。人工呼吸器を使い、経鼻経管栄養、気管切開をしており最重度の医療的ケアが必要です。

6月24日付「方丈の記」の山崎さんの手記に、「在宅重症児者のショートステイ(短期入所)の主要な受け入れ施設は高知県内で3カ所、合計10ベッドしかない」とありますが、私の息子が利用できるのは夜間に小児科医が対応可能な国立病院機構高知病院のみで、病棟に空床がある時だけです。

利用の競争率が高く希望日に予約できることはまれ。利用は年2回程度で1、2泊です。息子の体調が不安定であり利用できないこともあります。感染症のはやる冬場は受け入れ中止。年間を通じて利用できるわけでもありません。

日々の生活は、深夜でも2時間ごとの吸引や体位変換があり、まとまった睡眠は取れません。その中での1泊程度の利用は非常にありがたいものの、ショートステイの準備と施

設への移動で疲れ、十分に休めたとは言えない実情がありますが、何より、不安なのは、身内が病気になった場合などの緊急時です。また、停電が予想される台風前の予約も、直前ではほとんど無理でした。

同じ境遇の方々から聞こえてくる話は、ショートステイ先が全く足りないことと、もう一つ、サービスの前後のすきま時間の見守りをしてくれる方がなかなか探せないということです。

ある働くお母さんは、「全部を頼むわけではない。週のうちの1時間だけの支援があれば救われるのに」。あるお父さんは、「親が楽をしたいわけではない。自分らに何か起きてても何とかかなるという、日々の生活を安心して送る上でのよりどころがほしいだけ」と言われます。

県外の知人の話では、2016年春からかかりつけの急性期病院で、家族のレスパイトを目的とするベッドが2床確保され、その結果、月2回の日帰りショートステイ（送迎付き）と1泊の利用も月1回以上可能となり、その恩恵で、きょうだい児のために食事や旅行に行ける時間ができたと聞きました。一方、病院側からは、看護師が子供に慣れるために2泊以上してほしいと要望もあるそうです。

障がい児の母親は、障害が重いほど離職に追い込まれます。私も2016年春、職場復帰を断念しました。高齢者介護の問題も深刻ですが、子供の介護は成人してもずっと続きます。見守る家族の時間も人生も尊重されることが普通となる社会が来るように、今回の連載を機に関係機関の方々にご一考していただければありがたいです。

■支援慣れは災害時に生きる■

秋田市 佐々百合子 (40)

重症心身障害の子を2014年の11月、2歳3カ月で亡くしました。連載14回目の『「レスパイト」が道開く』の内容はまさにその通り。私が長男とともに、命を絶つことなく過ごすことができた一つの理由は、レスパイト制度の利用でした。

他人の手を借りるということは、恥ずかしいことでも何でもなく、家族みんなで生きていく上でとても必要なことです。レスパイトもヘルパーも大切な仕組みだと思います。

ただ、残念ながら秋田では、ヘルパーさんに家の中に入ってほしくない、入ってほしいが同居の祖父母が嫌がってお願いできないという話をよく聞きます。頑張りすぎて破綻しないだろうか、ご両親亡き後の子供さんは大丈夫なのかしら？ と、とても心配です。すぐに環境の変化になじむことが難しい障害があるからこそ、逆に普段からどれぐらい支援慣れして生活しているかがとても重要になるのです。

そしてそのような生活をしていることは、地震などの災害時に、避難所生活を送る上での備えにもつながるんです。地域につながっていれば理解者も増えます。もちろん嫌な思いもするけれど、プラスの面がはるかに大きい。そしてそのことは、健常者と呼ばれる方々にも意義があり、有益だと私は信じています。

2016年の4月、私の体験を本にしました。題名は「あなたは、わが子の死を願ったことがありますか？ 2年3カ月を駆け抜けた重い障害を持つ子との日々」。参考にさせていただければうれしいです。

■やっと1泊できました■

東京都 宮副和歩 (42)

高知県出身で、大学進学とともに地元を離れました。3歳の次男は先天性の脳障害で寝たきりです。2015年、気管切開をして24時間人工呼吸器を装着しました。栄養も胃ろうからチューブを介して取るようになりました。いわゆる超重症児です。

音十愛ちゃんの連載は Facebook で知り、高知新聞の Web サイトで閲覧。感激しました。

東京にいと、「田舎よりも良い環境にいるのでは？」と尋ねられますが、現実にはさほど変わりません。確かに有名な子ども病院があったり、手厚い施策を持つ自治体もありますが、対象はその地域住民だけで、私たちが暮らす区は23区内でも障害児に対するサービスレベルがとても低いとされています。

例えば2015年まで、当時2歳の息子には医療的ケアはなく、福祉事務所にレスパイト支援の相談をしたところ、「3歳までは育児と介護の差はつかないし、まだ小さいから重症心身障害児に該当するかも分からない」と言われ、短期入所の受給者証を出してもらうこともできず、ずっとどこにも預かってもらうことができませんでした。

保育園も、片まひのお友だちですら受け入れ拒否されるくらいなので、首も座らないわが子は、一時保育すら無理だと言われていました。必然的に私は仕事ができず無職で、無職を理由にヘルパー利用の受給者証も出してもらえず、利用できませんでした。

今は医療的ケアが必要になり、ご想像の通り、私の1日の睡眠は3～4時間の毎日です。買い物に出るのも大変なのでほぼ全てを宅配に頼っています。「大変ね」と言われますし、確かに心身の疲れは取れない日々ですが、一方で、医療的ケアが入ったことで、往診や訪問看護、ヘルパーさんにも来てもらえるようになり、少なくとも精神面ではとても軽くなりました。短期入所も許可が出て、やっと先日、慣らしのために1泊させてもらったところでした。

このような状況ですので日ごろからいろいろな情報を自分で探す習慣が付きました。SNSの恩恵は本当にありがたく、音十愛ちゃんの記事にも出会った次第です。

高知新聞は小学生の頃から読んでいました。私に障害児という存在を教えてくれたのも高知新聞です。30年ほど前に載った四万十市の水難障害児の森本佳子さんの連載は、彼女が同世代だったこともあり、私には衝撃的な記事でした。今回の音十愛ちゃんの記事は、わが身に通じる思いで読み進め、本当に本当に力をもらい、これからの生活に希望を持つことができました。ありがとうございました。

奇跡の笑顔 第3部・お便り特集(中) 孤独、孤立と闘う 高知新聞 2016年7月20日



現在、大阪で1カ月間の訓練に励んでいる
浜田奈那ちゃん(写真は母撮影)

■大阪に通い訓練する理由■

高知市 保健師 浜田知加(37)

娘の奈那は重度の聴覚障害と福山型筋ジストロフィーです。2014年、連載「眠れぬ母たち」の中で紹介された後、私は2015年、職場に復帰。娘は1年間の保育園を経て、2016年春から高知県立ろう学校幼稚部に入學。心身両面で急成長しています。

この数カ月間で単純な手話を少しずつ覚え、言葉にできない思いは体で表現し始めました。家では見る

ことのできない、表情、行動をたくさんしているようで、担任の先生が書いてくださる連絡帳が楽しみでたまりません。

表現力がついた娘は自宅にいる時、自分の思いが通らないと急に全身を脱力させ、頭を机にぶつけることをし始めました。筋力が弱い病気なので、それが自己表現なのです。娘の急成長に私の心身がついていけず、限界に近い状態になっていた時に、音十愛ちゃんの記事が載り、泣きながら読みました。

私たちは、東京や大阪、岡山へ時々、通院して専門の治療を受けています。7月6日からは大阪発達総合療育センターで約1カ月間の集中リハビリ訓練を受けています。娘の付き添いのため私と夫、私の母の3人が1週間ごとに交代します。

なぜ、そこまでして大阪へ行くのか。高知と違うからです。各職種が連携し、チームと

して取り組んでくれます。カンファレンスには全職種が顔を出し、娘にとっての「いつまで何をどうやって」という目標を共有。そして「問題解決型」ではなく「子どもの潜在能力・可能性を引き出す関わり方」をしてくれます。

例えば、「食」の問題。娘は4歳ですが、食形態は健常児の生後7、8カ月時程度。舌でつぶせるぐらいの硬さしか食べられず、どんなふうに摂食させたらいいのか悩みが尽きません。こうした問題に対して、歯科関係者や言語聴覚士はもちろん、理学療法士は食べる時の椅子や姿勢、作業療法士はスプーンやフォークなど道具の工夫で関わり、そこへ看護師や医師、介護士、ソーシャルワーカーらが家族と共に考えてくれるのです。

でも、県外に行くのは経費もかかるし、リスクも伴います。娘は発熱するとけいれんを起こし、10分間以上に及ぶ時もあります。親子2人で県外へ向かう最中にけいれんを起こしそうな時は病院もどこにあるか分からず、恐怖でした。以来、乗り物に乗る前は激しい不安に襲われ、今は極力、家族で行くようにしています。

人口の少ない高知では難病の症例数が少なく、同じ境遇の相談相手もおらず、家族は孤独や孤立を感じることも少なくありません。

重度障害のある子が生まれても、家族が普通の生活が送れるようにと願います。そのために▽家族のレスパイト（休息）がとれること▽障害児に関わる各職種がチームとして連携し関わること▽そのチームのコーディネーターや、上級アドバイザーがいること▽高知県全体でそのシステムをどう構築するのかを考えていくこと―が必要と感じます。

何をどうしていくべきなのか、私たち当事者の家族も、他の家族や支援者の方々とともに考え、行動したいと思います。

■血だらけの心、よく耐えた■

高知県内 メイシー（ペンネーム）

連載を熟読しました。高知新聞紙面への登場にきつと悩み抜き、覚悟を決めて承諾された山崎理恵さんと、伝えたいという新聞社側の思いがつながり、私たちの心に届いたことはもうそれだけで奇跡です。

7回目の「飛んで来た言葉のナイフ」は、紙面に穴があくほど何度も読み返しました。これはもう自分のことと重ねて痛く刺さりました。

私もシングルマザー。自閉症スペクトラムの娘がいます。3年半前、高知新聞に「エリンちゃん是不思議ちゃん」のタイトルで連載しました。「目に見えない障害」をどうしたら周囲に理解していただけるのか？ がそのきっかけでした。

山崎さんとは状況がやや異なりますが、「知ってほしい」と願う「志」は同じです。「目で見て分かる障害」に関しては、その支援態勢が整っているものと思っていたので連載が進むごとに、「いったいどうなっているんだ!？」と驚きが隠せませんでした。道なき道を開拓するのは大変なことです。口で言うのは簡単なことですが、それを体験し心を開いて勇気あふれる行動に移していくということは、強い心のもとでしかできないことを私は知っています。

山崎さんは、私たちの想像をはるかに超える大変さを乗り越え、目の前のことを一つ一つ手を抜かず頑張ってきたのも明らかです。それゆえ、同じ人間だからこそ「同情」ではなく、ここまで生きてきた姿勢を信頼してほしかった。そんな気持ちで読ませてもらいました。好奇の目と闘ってきた日々について、山崎さんが「ここは絶対、新聞に載せてほしいと思っています」と言われた場面は、私も心の底からよくよく分かりました！

心の中が血だらけの時もよく耐えて…。頑張りに頭が下がる思いです。生き抜いて新聞に載り、私の心に届けてくださった。ありがとうございます。

■とびっきりの笑顔に感涙■

高知市 西村聡実（36）

私も2017年、小学1年生になる重度自閉症の娘がいます。健常児のお兄ちゃんは現在、4年生。本当に悩みは尽きません。いい時も悪い時も波のようにやってくる。「なるようにしかならん。運命の神様はきつといる」という山崎理恵さんの言葉は心に響きました。

私もその姿勢で子育てに臨んでいます。それはあきらめではなく、「全てを受け入れる」という強い信念です。そうですね、理恵さん。

毎日、胸が苦しくなりながらもしっかり読んでいたのですが、最終回の音十愛ちゃんのとびっきりの笑顔と歩く姿を見て感涙しました。お母さんの頑張りはきっとこの笑顔を見るためだったんだと思います。この笑顔を守るために強く生きているんだと。本当に尊敬します。私も2人の子供の笑顔が消すことにならないように日々、生きています。

全く障害は違いますが、理恵さんの気持ち、苦しさ、つらさ、すごく分かります。これはきっと、私たちに与えられた意味のある人生、運命なんですよ。私は娘との生活で、今まで知らなかった世界、気付かなかった人の気持ちなどたくさん知ることができました。きっと娘を育てているのではなく、私が娘に育てられているのだと思います。お互い死ぬまで、いえ、死んだ後も心配事は尽きません。

自分のできる範囲で頑張っていきましょう。子供たちの最高の笑顔と幸せを願って。

■私はそこまでできるのか■

高知県内 匿名希望

私も「障害児」と区分される長女を育てています。現在2歳。妊娠中は異常なかったのですが、出産時に「先天性多発性関節拘縮症」という疾患があることが判明しました。幸いにも医療機関の数々の医師、看護師さんたちを含めたフォローもあり何とか日々、暮らしています。

第2部「成長編」を読ませていただくと、音十愛ちゃんの話は人ごとではありません。高知で「障害児」が通学する困難さが明確に厳しく出ていたと思いました。現在、長女は医療行為はありませんが、自己にて歩行するなどには困難で、日常生活は全介助です。

山崎さんはシングルマザーでこのような活動をし、お子さんを通学させることができましたが、実際、自分ならそこまでできるのだろうか悩みます。現在、仕事をしていますが、つど重なる子供の入院で職場にも迷惑をかけ、退職するべきか検討中です。

生活基盤をしっかりさせ、わが子に良質な勉学環境を整えてあげたいと思う半面、病院とリハビリ施設に通いながら、自分たち家族の生活をしていくことで精いっぱい。綱渡り状態です。音十愛ちゃんのケースを見習いたいと思いつつも、どう動けばよいか分からず、この先の展望も描けず悩んでいます。

奇跡の笑顔 第3部・お便り特集(下) 頑張る人にサポートを



高知新聞 2016年7月21日
高知県立療育福祉センターでリハビリ訓練を受ける山下皓義君(2015年8月、母撮影)

■受け止めて！知事さん■

高知市 高知スマイルサポート代表 山下君江(48)

2014年、高知新聞で連載された「眠れぬ母たち」の1人として紹介された山下皓義(こうき)(現在若草養護学校本校中学部2年)の母です。

続編となる音十愛ちゃんの記事がスタートした時、皓義は胃ろう造設の手術を終え入院中。私は病室で記事を読ませてもらいました。

母親の山崎理恵さんとは友人として交流はあったものの、回を追うごとに、あらためていろいろな思いが込み上げてきました。障害児家庭の抱える悩みは、夫婦間の気持ちのズレなども含めて同じようなものがあるんだと、毎日のように夫婦で語り合ったことです。

私自身は、障害のある子どもを育てているママたちのおしゃべり会「高知スマイルサポート」を5年前から月に1回、開いています。そこで私自身、さまざまな出会いや別れを経験し、参加者はみんな自分の思いのすべてをかけて子育てをしている—ということを実感します。

障害の理由はいろいろですが、最大の気掛かりは目の前のわが子の寿命です。「この子はいつまで元気でいられるんだろう」。そんな不安に押しつぶされそうになりながらも、みんな精いっぱい笑顔でわが子に注いでいます。ここにいてくれるだけで幸せであり、かけがえのない存在。そうした思いのもとに集まっています。

そんな中、私たちは先日、仲間のママを永遠に失うという悲しい出来事を経験しました。皆が自分を責めてしまったり、心が折れかけた時期もありました。それでも、彼女は今でも私たちの心の中で生き続け、私たちを支えてくれる仲間なのです。そして、もう二度と同じような悲劇が起こってほしくないと願います。

病気や障害があっても命ある限り、希望を持って生きられる世の中になってほしいと願うと同時に、その先には母も子もいずれ別々の人生を歩む—という意識が必要であり、母親への心のケア、子どもへは年齢や発達に寄り添った「自立」へのサポートがより一層必要だと感じています。

連載の最終回に載った理恵さんの「(実家の高松に帰らず)高知で生きていく」という言葉に私は涙があふれました。重度障害児向けのサポート体制がまだまだ不十分な高知。それでも高知を選ぶと言ってくださった決意を、県としてもしっかり受け止めてほしいのです。障害児家庭を、県として力強くサポートしていただきたいと…。

そして知事には、障害児たちの頼れる「高知家のお父さん」にどうかなっていただきたいのです。誰もが「高知に生まれてきて良かった」と言える県に。理恵さんの宣言に、私ももっと積極的にになりたいと気持ちを引き締めさせられました。

■悶々とする母は多い■

高知市 なっちゃん (ペンネーム)

亡くなった娘も重症心身障害でした。山崎さん親子の熱意と努力と、表に立つ勇気に頭が下がりました。

連載第2部終了後の「方丈の記」で高知県立大の教授が「権利は待っていても降ってこない。自分たちで作って制度化しないといけない」と、積極的に行動を起こすことの大切さを語っていますが、まさにその通りです。

ただ、こうした行動は、日々の介護に追われてヘトヘトの親子だけではなかなか進みません。役所に出向き何度か訴えるうちにあきらめるのが大半。そんな中で、音十愛ちゃんが着実に成長・発達した事実は、支援者側にも大きな成功例として受け止められ、やりがいを見いだせたのではないのでしょうか。

一方で、なかなか確かな成長が見えにくく、内在的に成長していても、外に表現ができない障害児者を抱えている家族もたくさんいます。そうしたお母さんたちは、どこかで声を大にして言うのがおこがましいのではないかとためらい、悶々(もんもん)としています。

障害があっても、名前を呼ばれ「ハイ」と返事のひと言でも返せると、施設や病院でも職員の方々にたくさん関わってもらえます。コミュニケーションを取りづらい人は、静かな見守りの中で生きています。親はほんの少しの表情や泣き声などの変化をキャッチしながら介護に追われているのですが。

時々、「うちの子は知的に問題がない。肢体不自由児だけに利用できる福祉制度が何もない」と不満を言われる方がおられますが、そういう言葉を聞く度に、重度障害児者の母は傷つきます。一人一人の価値ある生き方の達成を支援するため、介護する家族にまずは心

からの支援と協力を切に願うばかりです。

■同情の涙より励ましを■

岡山市 映像作家 山本守 (61)

今の時代、遠く離れて暮らしていてもインターネットで、こんな素晴らしい記事を読むことができることにまずは感謝します。21歳で高知を離れて、もうすぐ40年になりますが、愛すべき故郷でこんな壮絶な命のドラマが繰り広げられていて、それが誇張なく淡々とつづられていることに感動しました。第1話のつかみでドキッと、毎回恐る恐る読み進めました。

気の毒だとか、かわいそうだとか、最初は誰もがそう思います。でも思うだけでは何も改善しないという絶望的な状況がそこにありました。盲学校入学のために腹をくくって高知市の「ひろめ市場」で街頭演説に立った山崎理恵さん。広がる支援の輪。

離婚に至った第19話では、東北の女性が山崎さんの Facebook に「みんなが一本一本の糸になって理恵さんを支えよう！」と投稿。この呼び掛けを読んだ時、私は現代社会に差し込む光明を感じました。

「100万の同情の涙より、たった一言の励ましの声や行動が大切なんだ」と気付かせてくれた言葉でした。考えてみればその行為の連続こそが「やさしい社会そのもの」なんですよ。シングルマザーになった理恵さんを高知にとどまらせた温かい絆、その一本一本の糸となった人々に対する敬意が、私の心の中にあふれています。

山崎さん。音十愛ちゃんへの無償の愛を貫いてください。いつの日かすべてのご苦労が、笑い話になる未来が必ずやって来ると信じています。その未来を引っ張ってくる太いひも、私もそのひもを構成する1本の細い糸になればと思いました。

■言語聴覚士に望外の脚光■

高知リハビリテーション学院言語療法学科長 石川裕治 (55)

今回の連載で山崎さん親子の頑張りが感動を呼んでいるようですが、私たちとしても、従来ほとんど世に知られることのなかった言語聴覚士という仕事が音十愛ちゃんの成長の一助となり、仕事の一端を具体的に紹介してもらったことに大きな喜びを覚えています。

言語聴覚士は、国家資格になってまだ19年と歴史が浅く、理学療法士や作業療法士と比べて認知度は低いため、マスコミに載ることもめったにありません。それが、「親子が笑顔になってもらえるやりがいのある仕事」と理解していただけたのです。頑張ってきたかいがありました。

言語聴覚士は、言葉、声や発音、きこえ、そして飲み込みなどの問題で苦しんでいる方々に対し、より良い生活が送れるよう援助します。言語聴覚士を養成する学校は県内で本校のみ。連載に出てきた3施設には、合計15人の言語聴覚士がおり、そのうち高知リハビリテーション学院の出身者が12人。高知県内では280人が働き、その約9割を占めます。

連載が載ったのは、高知リハビリテーション学院を受ける高校生対象のオープンキャンパス開催直前。何というタイミングでしょう。非常に分かりやすい説明素材として早速活用してもらいました。参加者も興味深く聞き入り、言語聴覚士になって人の役に立ちたいという気持ちが高まったものと思います。

コミュニケーション機能や摂食・嚥下（えんげ）機能の発達・回復訓練については、まだまだ高知県内も知られていませんが、音十愛ちゃんのように早期に訓練を開始することがとても重要です。

言語療法学科は2016年、開設20年の節目を迎えました。連載の中で活躍した重症心身障害児者施設「土佐希望の家」の言語聴覚士のように、しっかりとした対応ができる人材の養成にさらに努め、高知の福祉のために役立ちたいとあらためて意を強くしています。

空き家調査アプリ開発 自治体の対策推進をサポート 大阪日日新聞 2016年7月21日

人口減少や高齢化に伴い、全国的に空き家が増えて社会問題になっている。国の調査（2013年度）で、大阪府内の総住宅数に対する空き家の割合（空き家率）は14.8%。地域の防犯・防災力の維持や景観・衛生面の保全のため、空き家対策に行政がさまざまな手段を講じる中、民間企業も空き家対策に関連した事業を開始している。



空き家調査用アプリを操作する黒木社長＝大阪市北区

総務省が5年に1度行う「住宅・土地統計調査」によると、全国の空き家は約820万戸。空き家率は13.5%で、前回調査（08年度）と比べて0.4ポイント上昇した。府内も、それぞれ5万4千戸、0.4ポイント増と増加傾向にある。

増え続ける空き家を巡り、国は空き家対策特別措置法を昨年6月に施行。倒壊などの恐れがある「特定空き家」と自治体が判定すると、所有者に撤去や修繕を指導、勧告、命令でき、命

令に違反すれば強制撤去もできる。

府は昨年2月、府内43市町村と「府空き家等対策市町村連携協議会」を立ち上げて情報を共有。このほか、中古住宅市場の活性化を目的に、関係団体でつくる「大阪の住まい活性化フォーラム」の相談窓口と市町村の相談窓口が連携し、相談内容によって窓口を紹介するなどの取り組みも昨年度スタートした。

さまざまな施策が進む中、空き家対策をサポートする事業を開始する民間企業も現れた。オーダーメイドで建設業者向け電子地図ソフトの受託・開発を行う「あっとクリエーション」（大阪市北区、黒木紀男社長）もその一つ。米・アップル社のタブレット端末「iPad」向けに、空き家調査をサポートするアプリを開発した。

アプリは、同社の電子地図ソフト「カンタンマップ」がベース。自治体から依頼を受けた業者が調査する際、画面上で電気やガスのメーター、表札の有無といった必要な項目をチェックし、端末のカメラで写真を写すと、地図上に反映される仕組み。パソコンにつながれば入力したデータを転送でき、事務所に戻ってパソコンに入力する従前の手間が解消できる。実際にアプリを導入した業者からは「これがなかったら、納期に間に合わなかった」といった声が寄せられているという。

1995年の阪神・淡路大震災の際、倒壊した建物の調査をした経験がある同社の黒木社長は「20年前から調査方法が変わっておらず、もっと簡単にできないかと思っていた」と開発の動機を説明。「今後は、訪問医療の従事者向けソフトの開発も考えていきたい」と意気込む。

同社を支援する日本政策金融公庫の担当者は「空き家問題の解決を目指した社会性のあふる取り組み。市場性もあり、成長を見込める」と期待を寄せる。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行